

文化・芸術

「なす」

1969年ごろ 紙本彩色
33・0センチ×45・5センチ

山口華楊 (1899～1984年)

関東各地で桜が満開となっています。春の花見のように、日本は四季折々の装いを楽しむ習慣から日本画にも春夏秋冬へのまなざしが表されてきました。

山口華楊は、京都の友禅色彩家に生まれ、竹内栖鳳の弟子、西村五雲に入門し、京都市立絵画専門学校に学びます。京都画壇の写生の伝統に、近代西洋画や革新的な日本画の知識を取り入れて新しい花鳥画を産み出し、黒豹(ひょう)やライオン、猫、洋犬などをモチーフに近代的な構成を持つ独自の動物画を完成させました。知的な構力と動物や植物を温かなまなざしで捉えました。

本作は初夏を感じさせる一点。青々と葉の茂ったナスとそこへ舞う黄色いチョウが目に留まります。上から螺旋(らせん)を描くようにチョウと花、膨らみつつある実が配され、生き物と植物の静かなたわむれとそこから実る豊かな恵みを穏やかに映しとっています。

当館の日本画コレクションを紹介する次回企画展の第1部「近代の『日本画』―四季の彩り」で展示します。(大谷)

《名画の扉》

企画展「The日本・画―大川美術館のコレクションを中心に」から

